



みどりの復興のモデル 足尾に喝采

A・N

足尾は日本の公害の原点と言われてきました。が今日足尾は緑と生物と水源の戻りつつある復興の「環境保全のモデル」に変わりつつあります。嬉しい限りです。

私は5歳まで足尾を水源とする渡良瀬川の中流の溪谷の出口旧大間々町に住んでいました。当時渡良瀬川の水は緑色で小さな洪水（急な増水）がよくありました。川は危険だから近づかないよう叱られたのを思い出します。その後学生時代には何度か足尾から日光、奥日光と歩きました。その際眼にした光景は忘れられません。青く汚れた水と一面のはげ山がありました。これが公害の原点だったのかと愕然としました。

その時以来「足尾の緑の復活」は頭に残りずっと森と生物の復活に対する地元の方々の執念と関係者の試行錯誤の活動状況の記事に注目してきました。ヘリコプターによる播種や種子を混ぜた重い粘土板の荷上げと急斜面への貼り付けなど関心を持っていました。いつか自分の目で皆さんの努力を拝見してみたい、できれば参加してみたいと願っていました。そんな折 宮脇方式の森づくりが続けられていることを知り「森びとプロジェクト委員会」の会員になることにしました。今年の5月には初めて植樹祭に参加しました。急斜面の植樹の大変さを体験できませんが植樹祭前の準備作業のご苦労を知りました。ポット苗作りから流砂止め、植樹の穴掘り、草刈、堆肥や黒土、炭の粉の荷揚げなど多くの方々の労力と努力に感心させられました。

微力ながら今後もできるだけ多く参加したいと考えています。

私の生きる証は森づくり

榎本 誠さん

2011年3月11日、東日本大震災発生の時、私は仙台の高層ビル21階にいました。今までに経験したことのない大きな揺れに、この世の終わりを覚悟しました。この時は単身赴任中で、ライフラインの不通と生活物資の無い不便な生活を強いられた二ヶ月後には、急性心筋梗塞で倒れました。手術で無事生還しましたが、この二つの出来事が私の人生観を大きく変えました。

現在、私（56歳）が働いている製紙業界に、王子製紙の「中興の祖」と言われる藤原銀次郎氏がいました。同氏は、「木材を大量に使う者は、木を山に返さねばならぬ」と口癖のように語り、90歳の天寿を全うするまで、木



に感謝し、山林を大切に思う情熱を貫き通した人だと聞いて感銘を受けた覚えがあります。また、本田健氏の著書「50代にしておきたい17のこと」を読んで、欧米では、自分が生きた証として、自分の名前とどんな生き方をしたのかエピソードを短く書いたベンチを公園に寄付する人がいることを知りました。

大震災、大病と短期間に生きることを考え直す機会に遭遇した私は、製紙業界で働く者のひとりとして、自分が生きた証を、山に木を植えることで実現したいと強く思うようになりました。斯様な心境でいる時に、2010年「関口宏のサンデーモーニング・年末スペシャル」で、岸井成格氏が紹介した「サルと人と森」（石川啄木著）を購入した時に「NPO法人森びとプロジェクト委員会」の存在を知り、「山と心に木を植える」という活動趣旨に魅かれて入会させて頂きました。そして、今年3月20日の「総会」と、5月19日の「足尾ふるさと森づくり」に単独で参加しました。知り合いもいないので終始無言で過ごしましたが、同僚・家族・友達同士で参加している人たちは、実に楽しそうに羨ましく感じました。私も仲間を募ればいいのですが、現時点ではおりません。

一方、植林作業では、黙々と急斜面を登り、急斜面に植林することの過酷さを思い知らされました。ただ苗木を植えるだけだと甘く考えていた自分が恥ずかしく思いました。しかし、植林し終えた後の山頂からの眺めは実に爽快でした。

今後活動していく中で提案があります。単独で参加する人のために、「ひとり参加」の方を紹介して頂けると嬉しく思います。同僚・家族・友達同士で参加されている方々の輪に加わるには勇気が要ります。同じ志で、単独参加する会員のための居場所を提供して頂きたいのです。ぜひご検討をお願い致します。



森の力で元気な琵琶湖を取り戻したい

田中玲子さん

琵琶湖のほとりに生まれ60余年、湖が汚染され弱っていくのをはがゆい思いで眺めてきました。もう一度、生き生きとした湖を取り戻したい、そんな願いを実現に結びつけていけばよいのか、・・・子育てや仕事に追われている間も、ずっと心の底にありました。

震災や原発の影響もあってか、近年特に、自然との共生や環境保護がクローズアップされることが多くなり、「森びと」さんの活動をはじめ、汽船沼の「森は海の恋人」運動、アクリウムの人達が伝える植物による水の浄化・・・などを知るにつけ、“緑を生かせば水は甦るのかも・・・”と考えるようになりました。

入会させて頂いても皆さんと共に現地で活動することは時間的、距離的に難しいかもしれませんが、未来に残すべき自然再生への取組み方をご教授願えればと思います。近頃は滋賀県でも徐々に自然環境を守ろうとするうねりが強まってきているのを感じます。私も大好きな琵琶湖のために1本でも多く緑の木を植え、育てたいと願っています。

自然を敬い、自然と共に生きていきたい

東京都・中西 忍さん

私が森びとプロジェクト委員会と初めて出会ったのは8年前の「足尾ふるさとの森づくり」からでした。植樹祭・草刈り・ポット苗づくりなどに触れ、自分の足で現地に立ち、松木沢に森が再生されていく光景を見て、人間の利潤追求のために破壊した自然を再生するためには長い時間と地道な活動を継続して行うことが必要だと感じていました。

そんな中、東日本大震災が発生し、改めて自然の猛威を思い知らされたとともに、原発事故によって私たちが



「ECOでクリーンなエネルギー」に騙されていたことを痛烈に感じました。地震・津波そして原発事故の放射能によって被災した地域は、いまだ復旧・復興も道半ばです。

足尾の山に森を復活させることも、東日本大震災からの復旧・復興も、目的は「安心して暮らせる社会」「いのちを大切にできる社会」を実現するためだと思うのです。そのために自然はなくてはならない存在です。私たち人間は自然に生かされているという謙虚な心を取り戻すことが今求められているのだと思います。

今後は福島県・南相馬市で「いのちを守る防潮堤の森づくり」に協力していくことを知り、その力に少しでもなればと思い正会員に申し込みました。足尾で培ってきた8年間の実績は、私の子供や孫の世代に豊かな自然を残していくと同時に、震災を教訓とした命を守る防潮堤の森づくりを成功させる重要な取り組みです。「山と心に木を植える」ことを通して、ひとつひとつと取り組みを着実に、そして継続していくことで「自然と人間が共生する社会」の実現を目指していきたいと思っています。

僕はチトになる

神奈川県・播摩信之さん

不法に山積みされた空き地のゴミや廃墟となった木造家屋すら、緑は何事もなかったように人々の営みの果てを覆い隠す——チトの仕事？ 小学校の課題図書だったドリュオンおじさんの「みどりのゆび」、夏休みの終わりに父に怒られながら読書感想文を書いた思い出がよみがえります。そしてあの頃いつも遊んでいた森の匂いや音も同時によみがえります。木登り、セミやクワガタ捕り、ドングリ拾いに基地作り、森が僕をたくましく健やかに育ててくれました。

あれから40年、思い出の森はありません。最近、森や林が消えていくことに妙に寂しく悲しい思いがこみ上げます。いかん、いかん、ノスタルジックな気分には浸っている場合かと思いつつも、何か心にこみ上げてきます。ある日、テレビで観た宮脇先生のドングリの苗を植える運動を思い出したとき、心の何かが見つかったような気がしました。

人間社会は、地球に共存する多くの命を追いやり消し去ってしまいました。ついには放射能という諸刃の剣で自らを追いやり消し去ってしまおうとしています。

僕は、チトになろうと思います。森びとプロジェクト委員会の一員として。よろしく願いいたします。